

14 【けらけらおんな】

そこでぼくは、気になっていたことを話しました。

「ななまがりでき、どっからか、おんなの、でっかいわらいごえがしたんじゃ」

からから

からから

がほがほ

がほがほ

「あのあたりに、家はないでしょう」

「ないけど、したんじゃ」

「あのあたりに、女はこないでしょう」

「こないけど、したんじゃ」

「それなら、【けらけらおんな】ですね」

懐爺は断言しました。

「【けらけらおんな】じゃと。あんなけらけら、ききたくないのう。わしにはからからとか、がほがほとかきこえたがのう」

「そうきこえたかもしれないが、【けらけらおんな】は若い女のおばけだから、やっぱりけらけらでしょう」

「かいじいは、そのわかいおんなのおばけに、あったことがあるんか」

「わたしは年寄りだから、若い女はおばけだろうと何だろうと、あっても笑ってもくれません」

「なんじゃ、つまらん」

「でも、村の若者に、話をきいたことがあります。若くて二枚目の。その人がやはり、七曲がり【けらけらおんな】に遭遇（そうぐう）しました。笑い声が若くて、なまめかしいので、思い切って振りかえったそうですが、すごい大女、牛や熊ほどもある大女で、興（きょう）ざめしたとのこと。【ゆきおんな】ではありませんが、見るなの禁、というものがあります。おばけを見るな。おばけを見るとわざわいがある。見るなの禁をやぶって、おばけにくわれた者も、たくさんいますから」

「【けらけらおんな】は、ひとをくうんかいな」

ぼくは興味本位（きょうみほんい）というか、興味津々（きょうみし

んしん) でききました。

「ある意味では、人をくうんでしょうな」

懐爺はけらけら笑います。

そしてつけ加えます。

「金ちゃんも、【けらけらおんな】にあったくらいだから、二枚目なんですよ」

「くだらんのう」

「女のおばけは、こわくないんです。女は幽霊（ゆうれい）がこわい。おばけでこわいのは、やはり男ですね。〈男〉がついたおばけは、一番こわい」

「たとえば」

ぼくはききました。

「たとえば、【おおかみおとこ】【たこおとこ】【いかおとこ】【くもおとこ】【わらいおとこ】【はこおとこ】【いしおとこ】【こおりおとこ】【すなおとこ】」

「【すなおとこ】かい」

ぼくがその名に興味を持ったのは、砂遊びが好きだったからで、ほかに理由はありません。

「【すなおとこ】は、外国の本にでてきます。こどもがいつまでも寝ないで起きていると、そのこどもの目に、砂を投げつけます。そのこどもの目玉が血だらけになって、飛びでると、それを持って帰って、自分のこどもにたべさせるんです。悪いやつです」

「そら、こどもがいつまでもおきていないで、はやくねむるように、おとながつくったはなしじゃろ」

「さすがは金ちゃん。そんなところでしょうね」

懐爺はみとめました。

「つまらんのう」

ぼくはいいました。

するとぼくは、もうひとつのおばけが、気になったのです。

【たこおとこ】や【いかおとこ】は想像がつくけれども、【わらいおとこ】とは、どんなおばけなんだろう。

「【わらいおとこ】もけらけらわらうのかい」

「これも外国のおぼけですがね。【わらいおとこ】は笑いません。顔一面が口で、口が裂（さ）けているから笑っているように見えるのです」

「かおがくちで、くちがかおかい」

ぼくは茶化（ちゃか）しました。

「そのとおりです」

懐爺は、真面目に答えました。

「その口がすごい。たとえば、【わらいおとこ】を退治しようと、鉄砲で撃っても、鉄砲の弾を、その口でぜんぶのみ込んでしまい、それから吐きだす。鉄砲を撃った者は、みんなその弾にやられて死んでしまいます」

「【わらいおとこ】は、わるいおとこなのかい」

たまたまぼくは、洒落（しゃれ）てみました。

「それが、男の中の男。悪人をやっつけるおぼけです」

「りっぱなおぼけじゃのう」

ぼくはいいました。

「おぼけはみんな立派です」

「もてんだろうのう」

ぼくはいいました。

「目も鼻もありませんからねえ」

懐爺はうなずきました。

「けっこんは、できんだろうのう。【ゆきおんな】は、けっこんしたんじやな。【けらけらおんな】も、けっこんできんだろうのう」

ぼくは行って、おもいつきでさらにいいます。

「つがいのおぼけは、おらんのか」

「さすがは金ちゃん。いいところついていますね」

懐爺は嬉しそうにいいました。

「たとえば【わらいおとこ】ではなく【わいら】なんかは、夫婦のおぼけですね。わいでなくて、わいらだから、複数ですものね」

「【わいら】が、つがいなら、にばいおそろしいんか」

「またいいところついていますね。でも【わいら】はだいたい土の中にいて、もぐらばかりたべているおぼけですから、人間もたべないし、あまりこわくはないですね」

「つまらん」

ぼくは唾をはきました。

「おばけは、ひとをくいそうなやつが、いちばんおもしろいじゃ。ひとをくいそうでなけりゃ、おもしろくない」

「でも本当にくわれたら、面白いではすみませんよ」

懐爺は、いきかせる口調でいいました。

「金ちゃんだって、いろんなおばけにでくわして、それでも何とかくわれなかったから、こうしていっしょに歩いているんです。わたしはもし金ちゃんがくわれたら、この世のおばけをみんな殺しますよ」

「かいじいは、おばけより、おそろしいのう」

ぼくは台詞(せりふ)とは裏腹に、懐爺のいつもながらのやさしさと、もしかすると友情をかんじました。

「わたしもおばけの、一種かもしれませぬ」

なぜか懐爺は、さびしそうにいいました。

「おとこのおばけはこわい。おんなのおばけはこわくない。かいじいはまえにそういったじゃろ」

「猿も木から落ちる。わたしも肥溜(こえだめ)に落ちました。おんなのおばけのほうが、こわいかもしれませぬ」

「じじいのおばけは、どうかのう」

懐爺は返事をしません。

祠に着きました。

懐爺はくらい奥にもぐって、すぐに寝息をたてました。

ぼくは安心感と幸福感にみたされ、はずむ足どりで家路(いえじ)についたものです。